

■ 編集だより

編集後記

平成 21 年 8 月 21 日から 23 日まで神戸で第 105 回日本精神神経学会学術総会が開催された。5 月に開催予定だったが、新型インフルエンザのために延期され開催されたのである。多少のプログラムの変更はあったものの、多くのプログラムが無事おこなわれた。これもひとえに前田会長、守田副会長をはじめスタッフの多大なご尽力によるものである。深謝申し上げたい。新型インフルエンザの勢いがさらに増す中での開催だったため、参加者が減るのではないかと危惧されたが、初日の朝一番からどの会場も大変盛況だった。会場ではマスクを着用している参加者を少数みかけたが、それ以外は例年とかわらない雰囲気だった。やはり 1 年に 1 度の総会を楽しみにしている会員が多い証であろう。また私自身にもあてはまることだが、専門医制度がはじまって少しでもポイントを稼いでおきたいと考える参加者が多いことも朝から盛況の大きな要因であろう。

最近の総会は、シンポジウムや教育講演の数が非常に多くなり、その充実ぶりは目を見張るばかりである。さまざまな分野について効率よく勉強できるので、大変ありがたい。本誌ではこれまでシンポジウムや教育講演の内容をすべて掲載し、会場で聞けなかった会員に対して重要な情報源の役割を果たしてきた。本年の学術総会の講演内容についてもじきに掲載が開始される予定である。ところが残念なことに、シンポジウムや教育講演の数の急激な増加と共に、誌面の都合上それらの内容をすべて本誌に掲載することが次第に困難になってきた。このため今後は学会ホームページなどを活用した内容の紹介も必要になるだろう。このほかにも編集委員会では、依頼総説、精神医学のフロンティア、精神神経学雑誌百年など様々な企画を通して、会員に興味深く有意義な情報を発信するよう努めている。そうはいつても、本誌の充実にはやはり投稿論文の充実が欠かせない。重厚な研究成果を報告した読み応えのある原著論文はもちろんのこと、1 例の症例報告であっても、臨床現場の苦労やそこから得た知見について勉強することは、読者自身の臨床に役立ち、大変有意義なことである。今後も多くの論文をご投稿いただき、本誌が発展していくことを期待してやまない。ところで現在本誌の掲載論文の筆頭著者に対して専門医の更新ポイント 60 点が与えられている。私見ではあるが、論文作成に関わる多大な労力を考えても、また多くの読者が論文からいろいろなことを勉強できることを考えても、もっとポイントを高くしてもよいのではないかと考えている。

つい先日総会が閉会したと思ったら、あっという間に 9 月も半ばにさしかかってしまった。夏が遠ざかり、気候が涼しくなるにつれ、今後新型インフルエンザの勢いがどの程度まで拡大するのか気がかりである。新聞やニュースは連日新型インフルエンザについて報道し、患者数の増加を報告している。今後 10 月にピークを迎えるとの話もある。いまだワクチン接種の方針についても決まっていない現状では、とりあえずは自分自身可能な範囲で予防に努めていくしかないだろう。人混みに出かけることを控える分、本誌に費す時間が増えるのではないかと考えている。

水上勝義